

〔研究報告〕

介護技術講習への外国人受講者に対する取り組み

中村 聡¹⁾、福士 尚葵¹⁾、工藤 雄行¹⁾
相馬 陽子¹⁾、山口かおる¹⁾、戸来 睦雄¹⁾

I. はじめに

平成16年10月社会福祉士及び介護福祉士法施行規則の一部改正により、介護福祉士試験の受験者の申請に応じ、介護福祉士指定養成施設等において行う介護等に関する専門的技術についての講習を修了した者については実技試験を免除する制度（以下、介護技術講習という）が導入された。介護技術講習は厚生労働省が所管する介護福祉士養成施設が、国際生活機能分類（ICF）を取り入れた心身の状況に応じた介護理論と実践に関する講習会を32時間開講し、修了認定にあたる総合評価を経て修了証明書を発行する。受講生は以後実施される国家試験の実技試験を3回まで免除される制度である。

弘前医療福祉大学短期大学部（以下、本学という）では、平成17年度より毎年介護技術講習会を開催している。平成25年度まで9年間、計30回開催し修了者956名を輩出しているが、今年度初めて外国人の受講希望者

が3名おり受け入れることとなった。本稿では、本学における介護技術講習での外国人受講者への対応、配慮した点などについて報告する。

II. 「介護技術講習」過程及び時間数

今回実施した介護技術講習は、二週にわたり土・日に開催され、内容は表1のとおりである。

III. 外国人受講者の受講結果と課題

受講した3名の外国人は、全員女性であり、年齢は30～40歳代である。日本在住が10年以上で日本の文化には大分馴染んできている。日本語の習得と理解のために日本語サークルに所属し、地域の活動にも積極的に参加している。3名は各々高齢者施設に勤務しており、介護福祉士国家資格取得に向けて準備中で、介護を行うに際して難しい日本語の学習にも励んでいる。今回、施設の協力と同僚らの応援を受けての受講であった。

表1

| 項目 | 内容 |
|----------------------------|--|
| (1) 介護過程の展開 (6時間) | ①介護における目標等の講義 ②事例に基づく介護過程に関する講義及び演習 |
| (2) コミュニケーション技術 (2.5時間) | コミュニケーションの技法に関する講義及び演習 |
| (3) 移動の介助等 (6時間) | ①社会生活維持拡大への技法に関する講義及び演習 ②安楽と安寧の技法に関する講義及び演習 |
| (4) 排泄の介助 (4時間) | 排泄の介助に関する講義及び演習 |
| (5) 衣服の着脱の介助 (3時間) | 衣服の着脱に関する講義及び演習 |
| (6) 食事の介助 (3時間) | 食事の介助に関する講義及び演習 |
| (7) 入浴の介助 (4時間) | ①入浴の介助に関する講義及び演習 ②身体の清潔の介助に関する講義及び演習 |
| (8) 総合評価 (3.5時間) | (1) から (7) までの講義内容の修得に係る評価 |
| 合計 | 32時間 |

1) 弘前医療福祉大学短期大学部 生活福祉学科 介護福祉専攻 (〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1)

1. 講義について

受講者は、受講当日初めてテキストを手にする事になり、外国人にとっては漢字、ひらがな、カタカナ、さらに普段はあまり使わない専門用語が含まれるテキストである。専門用語は初めて学習する日本人にも難しい。また、外国人にとって日本語の表現は難しく、その意味を理解することも困難だと思われる。介護の現場経験が3年以上の受講者とはいえ、聞いたことのない言葉も多いと思われる。講義は、全体の雰囲気や外国人受講者の表情等を見ながらテキストに沿って、ゆっくり、はっきりとした口調で説明を行った。時々話し方のスピードに問題がないかどうかを確認しながら、難しい専門用語の説明は生活のなかで耳にするような噛み砕いた説明を行うように心がけた。講義の合間には理解しにくい内容を確認し、休憩時間中に講義内容の補足などを行った。3名のなかには母国の大学を卒業した受講者もあり、日本語の理解力はある方だと思われるが、それでも読みにくく発音しにくい日本語は、各自ローマ字に書き換え理解できるように努めていた。そして、お互いにわかったことについての確認を行って演習に備える姿勢が見られた。

2. 演習について

演習は、受講者の所属施設・年齢・性別に関係なく3～4名で1グループを構成し、外国人受講者は3名を1グループとした。日本語での演習が困難になった場合、伝わりにくい日本語で話すよりも、同一言語の方が話しやすいのではないかと考え演習しやすい環境を整えた。演習で使用する物品の名称では和製英語と英語の相違で笑いがあり、場面設定や必要物品は他受講者とともにテキストを参考にしながら準備を行った。不備がないかどうか周りのグループやベッドを見ながら確認することも見られた。日頃の業務において使用することのない物品や目新しい物品の使用方法では指導者や他受講者に質問すること、実際に使用してみることで理解が深まったと話していた。講義と異なり、話すことと援助が同時に行われる事例展開では講義以上に戸惑う場面が見られた。演習は外国人に言わせれば回りくどく感じるような日本語が多い。例えば、ケアを実施する前の挨拶の言葉である「今日、担当させていただく〇〇と申します」である。これは「今日の担当の〇〇と申します（他にも言い換えることはできる）」のように「です」「ます」のような丁寧語で十分ではないかと思われる。テキスト通りにコミュニケーションを図ることは難しく、間違えることなく他受講者のようにスムーズに話すことはなかなかできなかった。3名ともに満足できるまでには至らなかったが努力する姿勢が随所に見られた。また、指導者が行う事例展開の模範を見ながら、テキストには説明されて

いない介助者役の手足の動きや顔の向き、事例のモデル役が行う動作について細部にわたってローマ字でメモをとり、練習で困らないように取り組んだ。それでも時間内にメモを取り終えることは困難で、休憩時間に指導者が付き添いメモの整理を行うことがしばしばであった。外国人受講者の場合、他受講者よりも言葉かけの面で苦労が多く、言葉に拘っていると介助が中途半端になり必要なケアが実施されないこともあり、言葉かけに課題が残った。3名で叱咤激励し合い、演習のモデル役・介助者役・解説者役が各々に声を出して実技を行い何回も確認を行った。その結果、他グループより時間が必要となり、演習担当指導者のローテーションや他グループへも影響することから、外国人グループに指導者を張り付けることにした。このことにより演習の進行が幾分ではあるがスムーズに行われた。

次週の介護技術講習日までに所属施設においてケアの練習をしてきたこと、慣れてきたこともあって事例に対する理解、声かけ、介護が前週よりも効果的に行われ、演習ごとの課題発表も実施させてほしいとの希望が聞かれた。課題発表は、全グループが行うように計画されていたが、外国人3名は他グループのように進行していないことを自覚していた。それでもどのような出来栄であっても練習の成果を全員から評価されたいと考えており、希望通り最後の演習課題を発表することができた。技術的なものより、ケアそのものの温かさが伝わってくる発表であったと受講者全員から評価された。途切れ途切れの言葉かけであっても、常に視線を合わせ笑顔があり穏やかに接していたことが印象深かった。受講中の3名は、上手くできなくてもできなくても相手にエールを送り、非難することなく、どうすればもっとよりよい介護ができるのかという前向きな姿勢で取り組んでいた。

3. 総合評価と受講後の感想

最終日の総合評価を行うにあたり、評価課題を日本語による表記のままでは、制限時間内に文字を読み取り、内容を理解するまでに時間を要することが予測されたため、英訳した評価課題も用意し提示した。3名とも他受講者と同様に総合評価を経て、無事に修了証明書を手にし介護技術講習を終了した。

介護技術講習修了後、3名から受講の感想などについて聞くことができた。

現在、今講習会で学び得たことは各所属先の施設で役立っており、受講して良かったと話している。

1) 介護技術講習受講まで

申し込む前から受講開始まで、外国人ということで差別されるのではないかと落ち着かない毎日だったという。受講を決意したのは、介護という現場で人と関わる

ことが好きで今後も続けたい職業であること、そのために勉強したい、介護について覚えたいという思いが強くあったこと、日本語の難しさについては支援してくれる人がいること等から受講に至った。

2) 受講して

日本語は言葉も表現も難しくてわかりにくい、講義も演習もわかりやすく説明・指導してもらえたため頑張る気持ちが持続した。日本人受講者と共に3名全員が一緒に修了証明書を手にして介護技術講習を終了することを目指したという。難しい日本語を話すことは、恥ずかしさや戸惑いもあったが意欲的に臨むことができた。最後の総合評価において、評価課題が英語表記であったことで、緊張しつつも少しではあるが落ちついて焦らずに臨むことができたという。

3) 受講後

施設内の同僚の応援を背に受講して学んだことを「教えてほしい」という要望がでたことで、所属施設の職員とテキストを基に学習し合い、統一したケアが提供できるように取り組んでいるという。今、国家試験に向けて問題集で学習中であるが知識不足を感じており、勉強会を開くことがあれば教えてほしいと話す。国家試験では難しい漢字や専門用語にひらがながふってあるが、問題を読むだけでかなり時間がかかり、全問解答しないうちに試験が終了するのではないかと心配している。

4. まとめ

今回、初めての外国人受講者を受け入れ、文化の違いはあっても日本在住が長いこともあって、私達よりも日本人的な側面に触れることができたが、日本語で理解してもらうには困難があることも実感した。長く日本に暮らして日本語を学習していることで日常生活上はあまり問題とならないことも、介護福祉士という専門職を目指すとき日常とは異なる専門用語や関連する職種との関わりが必要となる。このとき日本語の難しさがコミュニケーションに影響を及ぼす。介護技術講習の講義では、これまでよりも説明をよりわかりやすくしたことや、進

行に時間がかかったが理解されているかどうか頻回に確認しながら講義を行うなど、講義方法を考える良い機会となった。

演習は丁寧さや優しさ、ケアの安全性が不可欠であり、かた言の日本語ではあるが事前の説明や安全性の確認は十分に実施できていた。今回の日本人受講者は日常使われる言葉にはほとんど心配はなく、専門用語も日常の業務で聞いたことがある身近なものもあったと思われる。外国人受講者の場合は、日常に即して説明することで理解されたと思われるが、日本在住の有無や期間に関係なくテキストには日本語以外の言語も表記されて理解しやすいことが望ましいと思う。日本語はひらがな・カタカナ・漢字があり漢字は読み方も多様で、日本の生活が長い外国人が皆日本語を理解できるとは思えない。話すことは出来ても読んで書くことは困難ではないだろうか。また、テキストどおりという指導だけでなく外国人向けの会話が演習においても使われるようになれば、外国人受講者が安心して介護技術講習を受講できるのではないだろうか。

テキストは、介護技術講習開始時から見直しのないまま今日に至っている。平成19年度よりテキスト副読本の追加により事例の介助方法はマニュアル化され、指導者は統一した指導ができ、受講者は評価ポイントを把握して演習ができるように改善された。しかし、今回の外国人受講者のようなケースに対応するテキストの一層の改善が望まれる。

受講者から相手を尊重した声かけと丁寧なケアの重要性を学ぶことができたこと、日頃のケアを振り返ることができたこと、一つのケアについて議論し合えたこと等の感想があったことは介護技術講習の成果といえよう。

注) 倫理上の配慮について

本報告にあたり、個人及び所属長の了解を得て今回の報告を作成した。

(受理日 平成25年10月31日)